

今のすなはち是の經三卷なりといふことを。会を設け講き讀みて、ますます因果を信ひ、慇懃に誦み持つこと昼夜息まず。噫呼、奇しきかな。涅槃經に云ふが如し「もし見有る人善を修行はば、名天人に見れ、惡を修行はば、名地獄に見れむ」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

惡しき夢に依り至誠心をもちて經を誦ましめて奇しき表を示し命を全くすること得る縁 第二十

大和国添上郡山村里に、一の長いたる母有り。姓名詳ならず。彼の母に女有り。嫁きて二の子を生む。聾は官に県の主宰に遣さる。因りて妻子を率て任けらるる国に至り、歳余を経たり。ただし妻の母は土に留り家を守る。儼に女の為に夢に惡しき瑞相を見、すなはち驚き恐りて念はく「女の為に經を誦ましめむ」とおもふ。而れども家貧しきに依りて敢てすること得ず。心の念に勝へずして、自が著たる衣を脱ぎ、洗ひ淨め、擎げて奉として經を誦ましむ。然れども凶しき夢の相またなほ重ねて現る。母ますます心恐りて、また著たる裳を脱ぎ、淨洒めて先の如くして經を誦ましむ。女は任けらるる県の

国司の館に在り。生める子は館の庭の中に遊び、母は屋の裏に居る。二の子七の僧有りて屋の上に坐て經を讀むを見る。二の子母に白して言さく「屋の上に七軀の法師在りて經を讀む。邊に出でて見るべし」とまうす。彼の經を讀む音蜂の集り鳴くが如し。母聞きて怪び、起ちて後屋より出づ。すなはち常に居たる処の壁仆る。また七の法師忽然に見えず。女大に恐り怪び、自づから心の内に念はく「天地吾れを助けて壁に圧はれず」とおもふ。後に家を守る母、使を遣りて到り問はしめ、凶しき夢の状を陳べ、經を讀ましめたる事を伝ふ。女母の伝ふる状を聞き、大に怖りて心通ひ、ますます三宝を信ふ。すなはち知る、誦經の力と三宝の護念とを。

攝の神王の跣光を放ちて奇しき表を示し現報を得る縁 第二十一

諾樂京の東山に、一の寺有り。号けて金鷲と曰ふ。金鷲優婆塞斯の山寺に住む。故に以ちて字とす。今東大寺と成る。いまだ大寺を造らざる時に、聖武天皇の御世に、金鷲行者常に住みて道を修ふ。其の山寺に一の執金剛神の

は、梵網經は一〇六〇行、般若心經は十七行、である。いずれも小部の經典である。高価格と見える。

一大般涅槃經・師子吼菩薩品。上卷二十七縁にも引用。

第二十縁 あやしき表(い)の説話。三宝給・法十二に引用。

二(至誠心(觀無量壽經)。中卷六縁にもみえる。三奈良市山町あたり。

四原文「長母」。中卷四十二縁にもこの語がみえる。他に例を見ない語であり、その意味は正確にはわからない。「父母」の語と関係あるか。五国司。「県」が下文のように「任けらるる国」を意味する例に、土佐日記「県の四年五年はてて」がある。

六どの国であるかは未詳。任国を特定できる記述は本説話には含まれていない。

七国司の任期は、通常は四年とされた(統紀・慶雲三年(592)二月十八日格)。

八原文「見惡瑞相」。「瑞相」は善いしるしを意味するばあいも、悪いしるしを意味するばあいもあつた。後代の方丈記にも「世ノ乱ル、瑞相」の例がみえる。表現を「夢見惡瑞相」「凶夢相」「凶夢状」と変化させている。

九僧を誦じて誦經してもらふということができない。布施する物が無かつたのである。一〇衣を布へる布施として、僧に誦經してもらつた。本説話の標題に「使誦經」とあることより推して、長母が自分で誦經したのではなく僧に誦經してもらつた、と考へる。下文に、多く「しむ」を補説した。布施する物を持たない貧人が自分の衣服を施した例に、賢愚經・五貧人夫婦難施得現報品、現報當受經、などがある。

二「まず衣、次に裳」という例は中卷八縁。ここで政務を執つたのではない。国司の生活する建造物に守館、介館、などの「館」があつた。

三「七」という数字は誦經した經の巻数にかかわるであろう。七巻本の妙法蓮華經が誦經されたか。

四「母屋」の後方にはり出して建てられている建造物か。

五建物からあわててとび出したとたん、すぐに建物が崩壊した例に、搜神記・二・夏侯漢、同・一・費孝先、敦煌本搜神記・劉安、などがある。

六上卷二十三縁に「天知地知」、中卷三縁に「仰天哭願」とみえる。いずれも母と子の説話である。

第二十一縁 あやしき表(い)の説話。善業についての現報説話。今昔物語集・十七ノ四十九、扶桑略記・天平二十一年(西九条)に書本。

七「中卷十二縁」。

八「北門両辺作二神王、一名毘沙門、一名執金剛(不空羼索陀羅尼經)」「執金剛神王」という表現は、大品般若經・十七、大智度論・七十三、などにみえる。

九「ふくらばき」。

一〇「金鐘寺(東大寺要録・四)ともいう」。

一一未詳。日本書紀・大武天皇十四年(西六十六)十月八日条にみえる「優婆塞益田直金鍾」を擬する説は、年代的に問題がある。本書で「行者」と称されているのは優婆塞。三現存。塑像。国宝。